

花豆パイの試食と呼びかけで販売促進をはかり、戸赤を始め地域の宣伝を行いました。

花豆加工品の求評会

10月10日・やまざくら学校で

南会津地方の地域特産品の生産振興と加工品の開発をめざし、花豆加工品の求評会が開催されます。加工品出展者、花豆生産者、商工業関係者、行政関係者など多くの参加を呼びかけています。当日の事業内容：(1) 出展者による試作品説明と参加者による試食 (2) アドバイザーによる試作品へのコメント (3) 参加者による意見交換とアンケート



下郷限定販売の花豆パイ、店頭PR(9/23道の駅しもごう)

花豆の買い取り手引き【※おくや】

戸赤の皆様から買い取った花豆は、ほとんどが「花豆パイ」となりますので、より多くの原料を確保できますようご協力をお願いします。

第1回集荷：9月25日(火) 午前10時 戸赤集会所

第2回集荷：10月下旬 (後日日時をお知らせします)

買い取り価格：花豆講習会時の資料参照

品質管理：(1) 乾燥＝上から落としてカラカラと音が鳴るくらいに乾燥させる

(2) 選別＝できるだけ丁寧にゴミを取り除く ①極端に小さいのはB級品へ ②赤・軽い黒ズミ・シワよせなどはB級品へ ③その他、虫食い、割れ、芽吹き等は除く

(3) 袋詰め＝生産地名・生産者・等級・量目を表示

昨年の商品を加工してみても…

A級品の花豆からも浮豆が大量に出ましたので、十分な乾燥をお願いします。乾燥が弱く割ると芽が出始めているものは浮豆となります。

B級品は浮豆が多く炊きムラが出て加工するには苦勞しますが、今年も商品の開発をしてみます。

名物菓子となるよう、A級とB級で2種類の商品を作りたいと考えておりますので、より良い乾燥と選別をお願いします。

【木地の学習No.23】…寛文十(1670)年の口上書の所に「筒井村神主小倉新座左衛門」と記されているのが、姓の初出である。氏子で最初の姓があらわれるのが、享保五(1720)年「和州御造栄山、小倉金兵衛」である。そして「小椋姓」があらわれるのは享保二十年「和州北山、小椋弥兵衛」で、会津では延享三(1746)年「見沢(現・昭和村小野川)小椋吉右衛門」である。君ヶ畑氏子狩帳もほぼこの時期に「小椋姓」の初出を見る。もとより氏子狩帳の早期の段階では姓を記すことはないが、時代を経るに従って姓の記述が増えてくる。特に宝暦年間以降は「小椋姓」が格段に多くなって来る。…氏子狩帳は後期になるに従って姓を書き記すことが多くなって来る。特に小椋姓が大半を占めてくるが、小椋姓化が根元主導によってもたらされたことを考えると、氏子狩帳に記された小椋姓は必ずしも本姓であったとは限らない。同一人が氏子狩のたびに姓の表記が小椋姓から以前の姓に、以前の姓から小椋姓へと行きつ戻りつしていることを思うと小椋姓は「ほんね」ではなく「たてまえ」の表記であると確信する。根元地と離れたところの関係で書かれている姓こそ本姓に近いのではないかと考えるのである。…数少ない例の中で結論づけることはできないが古代から中世にかけて小椋姓を見ることはできないし、また近世初期にも会津の中では同様である。しかし時代の経過と共に他姓の木地師達も近世末頃には大部分が小椋氏を称するようになってくるのである。柳田国男が「史料としての伝説」で述べているように、小椋姓が広がったのは木地祖神としての惟高親王伝説が確立し、氏子狩と称して諸国を巡回するようになってからであると考えた方が妥当であろう。木地根元地に近い所回国頻度の多い所から小椋姓が広がりを見せることを思えば、僻遠の地である会津や東北地方の木地師は小椋氏を称する時期が遅れるのは当然のことといえる。もうひとつ、会津に小椋姓が広がっていった背景には寛政から文化にかけて三河、信州、飛騨より続々と会津入りした者達がいいて、彼らはすでに小椋化した人達であったという影響を見逃すわけにはいかない。これらのことがあいまって先行して会津で稼業していた木地師達も小椋姓化していったと言っても大きな過ちではないだろう。(会津地方歴史民俗資料館「木地語り」より) (つづく)

戸赤の川遊び この魅力を最大に活かすには……

川遊びを中心とした自然体験メニューは、ことしの夏特に脚光を浴びました。川が安全であること、川底がなめらかな岩盤であり素足で歩いても痛くないこと、滑り台のように遊べる箇所があること、監視の目が届きやすいことなど優れた点がそろっています。戸赤の魅力としてこの川を活かした地域活性化の知恵が求められております。



73人が楽しんだ7月25日(二本松地内の小学校日帰り行事)・この写真のほか大人の宿泊客にも人気の川遊び、道路が近く目が届くことも安心のひとつ

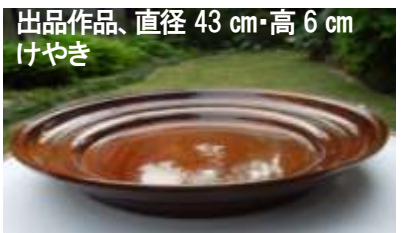


学校方面から望む(戸赤集落下手)

道路工事に着手(戸赤)
戸赤集落内の道路改良工事が着手され、スムーズな往来ができるようになります。特に除雪時の不便さがなくなるものと期待されます。

戸赤木地工房の作品 展示「会津・漆の芸術祭」

「会津・漆の芸術祭」に戸赤の木地工房から生まれた作品が展示されます。出品作品は室井春雄氏製作の盛器。展示場所は会津若松日新町末廣酒造嘉永蔵ホール、期間は10月6日から11月23日まで。公募で選考委員会の審査結果を経ての出品となり、ガイドブックとホームページが用意される予定です。



出品作品、直径43cm・高6cm けやき



新開方面から望む(戸赤集落下手)



新開方面から望む(二枚橋下手)

「花豆パイ」ラジオでPR

エフエムふくしま

9月18日放送

「ふくしま6次化ラジオ」の番組で戸赤の花豆パイが紹介されました。下郷町の特産品と観光を組み合わせ、塔のへつり、道の駅、観音沼自然公園とともに食用ほうずきもとりあげられました。インタビューには花豆に室井(春)、食用ほうずきに渡部貴人(沢田)が答えました。

(花豆の学習[No.22])花豆(ベニバナインゲン)の栽培

1生理・生態 ○花豆は冷涼な気候を好み、特に開花結実する7月下旬から9月下旬お気温の福井地域が適地となる。○結実率は適地でも10%と低く標高400m以下の地域ではほとんど結実しない。○種子は自家採取が行われているが、長年の栽培で小型化する傾向が見られるので、種子の更新も必要である。品種間交雑が起こるので、特に白花種との混植は避ける。 2主な作型 戸赤地区では早生と晩生の2種類が栽培されている。ポットで3週間程度育苗したのち定植する。早生は5月上旬に播種し、8月中旬から初霜の降りる10月下旬まで収穫する。晩生では5月下旬に播種し、9月初旬から初霜の降りる10月下旬まで収穫する。早生で直播する場合には、晩霜を避けて5月下旬に圃場に播種する。 3圃場の準備 土壌病害回避のため根菜類、麦類と組み合わせた長期輪作計画を立て、同じ圃場への作付は3年以上の間隔をとる。また、花豆は湿害に弱く過湿な条件では連作でなくても生育不良となるので、定期的に心土破碎を行い、耕盤層の生成を未然に防ぐようにする。(南会津農林事務所農業振興普及部資料から)〈つづ〉